

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03125

研究課題名（和文）オスマン帝国近世～近代における社会変容とイスラム知識人（ウラマー）名望家層の成立

研究課題名（英文）Ulama Families in the Early Modern Ottoman Empire: A Study of the Eb&amp;#252;ssuud Family

研究代表者

松尾 有里子（MATSUO, YURIKO）

お茶の水女子大学・文教育学部・基幹研究院研究院

研究者番号：50598589

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：この研究はオスマン帝国(1299-1922)において16世紀から20世紀初頭までのウラマー（イスラム知識人）の家系の活動に光を当てることで、前近代から近代へのオスマン帝国、ひいては中東イスラム世界の社会変容を具体的に考察した。ウラマーは一般に近代化の阻害要因としてみなされがちであったが、近代社会に合致した都市名望家へと変貌を遂げていたエブスード家の活動を明らかにしたことで、新たな歴史的視角を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はオスマン帝国(1299-1922)で16世紀から20世紀初頭まで存在したウラマー（イスラム知識人）の家系、エブスード家の人びとの活動を分析し、近代移行期のオスマン帝国、中東イスラム世界の社会変容を具体的に考察した。ウラマーはイスラム社会を規定する存在であるがゆえに、ともすれば西欧的近代化改革の阻害要因として解される傾向があった。しかし、現地調査で収集した史料の分析から彼らが近代的教育の受容や土地の寄進などを通じ都市の名士として近代以降も活躍していたことを新たに明らかにした。これらの発見と成果は国際シンポジウム等の学会活動や英文・和文論文の発表を通じ、国内外で社会に還元した。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on the activities of the ulama (Islamic intellectuals) family from the 16th century to the beginning of the 20th century in the Ottoman Empire (1299-1922). The Ulama were generally regarded as a force that hindered modernization, but by clarifying the activities of the Ebussuud family, who had transformed into a prominent figure in the city.

研究分野：東洋史

キーワード：東洋史 イスラム 女性 ウラマー 帝国 名家 知識人 近代化

## 1. 研究開始当初の背景

(1) オスマン帝国(1299-1922)において、ウラマーはイスラム的統治理念を具現化する存在として、司法と文教の両面から政権を支えていた。具体的にはイスラム法廷を主宰するイスラム法官として、マドラサ(イスラム学院)の教授として官職を与えられ、イルミエと呼ばれた階層的秩序のもとに統合され、支配組織の一翼を担っていた。本研究は、16世紀以降イルミエの高位官職を独占していたウラマー家系、エブスード家の主に近世から近代(17世紀~20世紀初頭)の活動の分析を通じて、国家の変容期を迎えていたオスマン社会の実態を検証することを目的とした。この研究課題を掲げた理由の一つには近年のオスマン史研究の学問的潮流が関係する。これは、オスマン帝国の歴史において国家の最盛期を過ぎた「衰退期」と長らくみなされてきた17-18世紀を「近世」としてとらえなおし、長命な政権を可能にしたオスマン帝国の支配のメカニズムを解明しようとする潮流である。具体的にはVirginia Aksan and Daniel Goffman, *The Early Modern Ottomans: Remapping the Empire*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007. や Baki Tezcan, *The Second Ottoman Empire Political and Social Transformation in the Early Modern World*. Cambridge: Cambridge University Press, 2010. 等の研究が知られる。これらの研究で、この時期は帝国内外の要因により、その支配システムが構造的変化をとげ、オスマン帝国もまた「近代」の前提要件を胚胎する「近世」(the early modern period) 的社会を迎えていたのではないかと指摘されている。

(2) 現在明らかにされつつある「近世」オスマン帝国では、専制君主体制から軍人、ウラマー、官僚らの派閥によって主導される官僚制国家へと徐々に変容していた。これはオスマン帝国が戦争主体の領土拡張を目指した専制君主の時代から領土の保全と徴税を主体とした財政国家化へと変わりつつあったからである。本研究がエブスード家に着目したのも同家がこの国家変革期に政権の中核にあり、新たな官僚制主体のオスマン統治にウラマーたちがどのように参与していたのかを具体的に検証できるのではないかと考えたからである。申請者はすでに16世紀の同家のウラマーの動向については複数の論文を発表しており、さらに研究対象となる年代を広げることで、「近世」オスマン帝国の社会変容の実態が明らかになると確信した。

## 2. 研究の目的

(1) この研究では、オスマン帝国の支配の一翼を担っていたウラマー(イスラム知識人)階層の政治、社会、経済活動の検証を通じて、従来、帝国の「衰退期」として等閑視されがちであった近世から近代への国家変革期の社会変容の実情を明らかにする。具体的には、16世紀半ば以降、支配組織の中で要職を輩出してきたウラマーの家系であるエブスード家の人びとの活動を時系列に分析した。

(2) オスマン帝国は16世紀後半以降、専制君主が牽引した戦争による領土拡大政策から転じて、確定した領土を中心とした新たな税制システムを導入した財政国家と化していく。前近代のオスマン政権内部には官職を一族で独占する名家が存在したが、新たな財政国家化に対応できずその大半は没落してしまう。その中でエブスード家はなぜ帝国末期まで存続し得たのだろうか。この家系の人々の活動を時系列に整理すると、国家の変容にいかに対処し、生き延びてきた要因が探究できると考えた。なお、ウラマーは近代化改革を進めるオスマン帝国にとり、これまで近代化の阻害要因としてしばしば位置づけられる傾向にあった。オスマン帝国が近代を迎え

る上でウラマー層がどのように対処していたのかを新たな歴史的視角で提示することも可能となると考えた。

### 3．研究の方法

年度毎に研究目標を設定し、大学の夏期、冬期休暇を利用して、トルコ共和国への現地調査を行った。トルコ共和国のイスタンブルには、大統領府オスマン古文書館とイスラム学術センターが、首都アンカラにはワクフ総局附属古文書館があり、オスマン帝国の文書史料の閲読と収集が可能である。エブスード家に関わるオスマン・トルコ語史料を収集した。2021年の新型コロナウイルスの世界的流行で現地調査が出来なかった時期には、ウラマーの伝記集などの写本文献の検討を行った。またエブスード家の墓所にある墓碑銘の検討、宗教寄進地の財産記録の検証など国内で行える研究を主に進めていった。

### 4．研究成果

本研究では、トルコ共和国での現地調査で収集したウラマーの官僚組織であるイルミエについての行政文書やウラマーの伝記集などの写本史料の検討に基づいて、まず、エブスード家の家系図の作成を行い、家系に連なる血縁者や姻戚関係、それに伴って発生した政権内部の様々なパトロネージ関係を視覚化した。家系に関連する100余名の官職、出身地、出身家系等のデータを集約し、この家系を中心にどのような人的ネットワークが築かれていたのかを明らかにした。イルミエの官職は一代限りで世襲ができないのが原則であったが、エブスード家は16世紀中葉にイルミエの筆頭職であるシェヒュルイسلام（イسلامの長老）を輩出した後、官職任命の実権を一族で掌握し、要職を半ば世襲する形でイルミエ内での影響力を強めて行った。このような権力基盤が築けたのも君主（スルタン）の権力が弱体化し、官僚制主導の派閥政治が本格化した時代背景とも大いに関係がある。17世紀までの一族の発展はイルミエ官職への継続的な就任と世襲により、官僚制に基づく利益を享受していたと結論できる。

17世紀後半になると同家は徐々にイルミエの要職から後退し始める。この家系のウラマーたちの主な活動の場は首都イスタンブルと同家の出身地である中央アナトリアのイスキリブに設立した宗教寄進地（ワクフ）となっていた。管財人としてワクフ運営に代々関与していた同家のウラマーたちは、モスク、イスラム学問所（マドラサ）、コーラン学校など宗教・教育施設の管理だけでなく、水路の建設や住宅の整備など都市のアメニティづくりにも寄与していた。ワクフ文書には所在地の社会との深いつながりが伺え、特にコーラン学校の設立と運営はムスリムに教育の機会を与えるとともに、教師の雇用にも貢献していたと言える。

19世紀のタンズィマートと呼ばれた一連の近代化改革の時代を迎えると、エブスード家の人びとはイスラムの伝統教育だけではなく近代教育にも携わっていた。イスタンブルのエユップ地区にあるエブスード家の墓所には同家の女性たちが眠っているが、墓誌を検討すると新たに開校された女子師範学校や女子芸術学校などに進学し、教師として働いていた者が一定数認められた。一方で一族の男性は伝統教育に従事し書家として知られた者や近代教育の新式学校に通い文部官僚や師範学校教師として働く者も現れた。このように同家のウラマーたちは伝統的なイسلام教育ばかりでなく、近代教育にも積極的に関わっていたのが特徴的と言える。

現在、オスマン史研究において、近世から近代への移行期についての問題関心は強まっているものの、長いスパンでしかも特定の集団に着目して、社会変容の時代的推移を検証する研究は

極めて少ないのが現状である。また通説では、伝統的教育に従事するウラマーは近代以降、近代教育を受けたテクノクラートの台頭に対し、存在意義が徐々に失われていったと理解されてきた。しかしながら、本研究で近世から近代への移行期のウラマー家系の活動を検討したところ、この家系のウラマー自体が近代教育をむしろ貪欲に吸収しようとしていた事実が判明した。以上から、本研究では16世紀後半から20世紀初頭までのウラマー家系の活動を長期にわたって活写することで、帝国の変革期のウラマーの社会的役割を再考するとともに、この一族が都市社会に根ざした近代的な名望家として変貌していく過程にも光を当てることができたと考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 松尾有里子	4. 巻 8
2. 論文標題 偉大なる母后キョセムの世紀	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴人マガジン	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松尾有里子	4. 巻 26
2. 論文標題 偉大なる母後の時代	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ことばと文化	6. 最初と最後の頁 47-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松尾有里子	4. 巻 8
2. 論文標題 終わりゆく壮麗王の世紀	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴人マガジン	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松尾有里子	4. 巻 24
2. 論文標題 壮麗王のもう一つの物語	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ことばと文化	6. 最初と最後の頁 102-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾 有里子	4. 巻 62
2. 論文標題 オスマン帝国近代における女子師範学校(一八七〇ー一九一八)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 お茶の水史学	6. 最初と最後の頁 61-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松尾有里子	4. 巻 8
2. 論文標題 壮麗王スレイマン1世と「女人の統治」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 歴人マガジン	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 松尾有里子
2. 発表標題 オスマン帝国近代の「投稿」する女性たち-女性雑誌の読者欄を手がかりに-
3. 学会等名 九州史学会大会イスラム文明学部会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松尾有里子
2. 発表標題 オスマン帝国近代の投稿する女性たち
3. 学会等名 九州史学大会イスラム文明学部会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松尾有里子
2. 発表標題 オスマン帝国近代の女性 エミネ・セミネ
3. 学会等名 記憶と記録にみる100年の歴史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松尾有里子
2. 発表標題 20世紀初頭イスタンブルにおける女性教師養成校(1909-1933)
3. 学会等名 日本中東学会第35回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松尾有里子
2. 発表標題 オスマン帝国末期～共和国初期における女子教育と女性教師
3. 学会等名 オスマン史研究会第8回定例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松尾有里子
2. 発表標題 Ulama Families in the Ottoman Empire : Focusing on the Ebussud Family
3. 学会等名 近代オスマン帝国の軍事と教育(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岡真理、後藤絵美（編著）（松尾有里子）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 287
3. 書名 記憶と記録にみる女性たちと百年（分担執筆：「近代トルコ女性のリベルテを求めて」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------